

# たより

## 『美紗の会』 ニユース

第24号

平成九年五月二五日

発行者  
「美紗の会」  
03-3441-2726  
編集責任者  
川邊 紀 恵

### 盛會だった虹の会

本郷 公基

去る4月26日、新緑と阜の美しい八芳園で開催された「虹の会」は予定を上回る参加者を得て成功裡に終始した。開演前から続々と美紗の会会員を始め西松・山村双方の知人、友人、両師匠の芸の愛好者や関係者が集まり、まずは今川宗知師(加藤マネジャラーの母堂)の社中によるお手前と吉野屋の茶菓子を本郷葵虹作の屏風と着物を観賞しながら、味わい、演奏会場では加藤マネジャラーの明るく軽快な司会に始まり山村千代恵師の上方舞と布師匠の美声を堪能した。松岡正剛氏のお話は邦楽に限らず日本の伝統文化全体に及び興味尽きぬものがあった。特に平安時代貴族文化の美意識「ものあわれ」が鎌倉時代武家社会になると「あつぱれ」となるなどと興味深く拝聴した。

最後の演目「ぐち」では布師匠の一曲入魂の熱演と唄にあわせた美しい山村千代恵師の艶のある上方舞には終わると共に盛大な拍手が鳴り響いた。

宴席は百名を超える参加者があり、加藤さんの楽しい司会のもとに賑々しく、懐石料理の美味に舌打ちながら、予定時間を過ぎてまで楽しく懇談が続いた。

以上のように第一回「虹の会」は美紗の会会員にとつてチケットの消化に苦戦した、2時間のお座敷での真面目な演奏会に席も立てず足のしびれに悩まされた感があったが、師匠の熱演と八芳園という舞台の良さもあり会の成功を喜びたいと思う。



先発の布師先生に一週間遅れてお母様と私はアメリカへの旅に出ました。なにしろ機内で「コーラを下さい」というと水が出てくる様な語学力の私達の事ですから、途中赤ゲットよろしく珍道中を重ねてとにかくポストンへ辿りつきました。

アメリカ新旧の良さを併せ持つというポストン。暮れなずむ河畔に並ぶ建物の美しさに息をのむ思いでした。

中一日置いてアムハーストへ向いました。嘗て観光で訪れたアメリカの(殊に西部の)都市に比べて何と静かであらう。でもそこへ感傷に浸っている暇はありません。私達は布師先生のパフォーマンスの応援に来たのですから。

そしてその日がやってきました。三月二十八日、ウエスリン大学でジョンソルト教授と篠原けいじさんという方(御両親に背いてまでアメリカに住んで版面の刷り師の勉強をしている好青年)との浮世絵についての講演があり、私達にはよく判らないけれど聴く人達はとても熱心で笑ったり質問したり、熱気溢れる感じでした。

そして午後八時より布師先生の舞台です。大学内のワイルドミュージックホールの舞

台に赤い毛せんが敷かれて、本郷葵虹師染色の美しい着物の先生が登場、ジョンソルト教授の解説で「宇治茶」その他の弾き唄い、ここまではいつも見慣れている先生の舞台ですが、そのあとがとても素晴らしかったのです。ガーナの黒人マーチン氏がコンボで時間を稼ぐ間に着換えて現れた先生は黒のロングドレスにハイヒール、大きな黒のイヤリングという格好よさ。歌舞伎の大き

つまよろしく三味線抱えてマーチン氏のドラムと米人ダーク氏のベースとの和洋合奏。

前夜一回合わせただけというのに、その高低、緩急ビタリときまる素晴らしさ。先生は「殆ど即興」と済ましておっしゃるがまさに芸術家同志の呼吸という事でしょう。そしてつづいて打上げの会に私達もお供しましたが、ごちそうはピザと各自一杯のワインだけ。そして言葉の通じ合わない人達といふのに、お母様手作りの布の小袋を腰にさげて、誰かともなくスクラム組んで、ホッ、ホッと声をかけながらライندگانをほじめる楽しさ。日米亜、中国とさまざまな国の人達の国境を越えた友情の盛り上がり感動的で夜の更けるのも忘れて拍手していました。

さて次はニユーヨークで三月三十一日ソルト教授による

北園克衛の翻訳詩集「グラスベレー」が、日米友好委員会の翻訳賞に輝きその授賞式に列席させていただきました。その日ニユーヨークは朝起きても雪は何やら吉兆とか。吹雪の中を頑張って会場のコロンビア大学のセントホールへ向いましたが会場は満員、この席でニユーヨーク在住の大先輩高橋様御夫妻や田野純子さんにお逢いできたのは嬉しい事でした。席上コロンビア大学名誉教授トナルドキーン氏達やワシントンの日米友好委員会会長の御挨拶がつづき、最後にソルト教授の受賞あいさつがあり、北園克衛の年代順に六編の詩を朗唱し、晩年の「ブルー」の詩を布師先生が三味線にのせて唄い、まさに日本語と英語の共演で、あたりは不思議な空気に包まれました。

そして最後に布師先生の「黒髪」が披露されました。机の上に置かれたざぶとんにチョコンと坐って先生が唄い出されると、ざわめいていた会場はシーンと静まり返って、目を閉じて唄う先生の声のみが流れてゆき、終了後は拍手やサインを求めた方が次々、外国の方にも三味線の音は心にしみるのだなと思われました。

翌日は打って変わった晴天で、ニユーヨークを観光し、夜にかけてアムハーストへ帰

りました。車窓から空を見ると満天の星で北斗七星がひととき輝いていたのが、とても印象的でした。

さて、帰国も迫った四月三日、ソルト教授の授業に布師先生が唄と三味をお聴せする日になりました。前日教授は「学生達に侘びとか寂の意味を教えるのがむずかしい」と云われましたが、本当に日本人以上に日本を知っておられる方です。当日の講義にちなんで布師先生は「六歌仙」など江戸端唄を披露されましたが、白人、黒人、茶色と様々な国籍の学生さん達が身をのり出したり、じつと眼目したりして聴き入り、終了後は私達にまで挨拶に来てくれて初めて聴いたけれどすごく感動したとたどたどしい日本語で話しかける生徒さんもおりました。

外国で三味線音楽を披露する事の意義やよろこびを身をもって実践し続けておられる布師先生の姿勢には何とか応援してさし上げたいと思いつながら何も出来ない自分の微力ながらもどかし思いました。

そして今回の旅行では今までの観光ツアーと違って裏からアメリカを見られたという気がします。前述の篠原けいじさん、又ウエスリン大学で日本史を教えておられるというビル教授、狐高の芸術家(写真家でも詩人でもある方)ともいえるおヒゲのアイルコーエンさん等々素敵な方達と巡り合っってお話を聞けたという事は私の生涯に一度の貴重な体験となつて、本当に良い旅をしてきたという満足と感激にまだ酔っている毎日です。

アメリカ演奏旅行  
随記  
その感動

増田 徳子

「ブルー」の詩を布師先生が三味線にのせて唄い、まさに日本語と英語の共演で、あたりは不思議な空気に包まれました。

そして最後に布師先生の「黒髪」が披露されました。机の上に置かれたざぶとんにチョコンと坐って先生が唄い出されると、ざわめいていた会場はシーンと静まり返って、目を閉じて唄う先生の声のみが流れてゆき、終了後は拍手やサインを求めた方が次々、外国の方にも三味線の音は心にしみるのだなと思われました。

翌日は打って変わった晴天で、ニユーヨークを観光し、夜にかけてアムハーストへ帰

りました。車窓から空を見ると満天の星で北斗七星がひととき輝いていたのが、とても印象的でした。

さて、帰国も迫った四月三日、ソルト教授の授業に布師先生が唄と三味をお聴せする日になりました。前日教授は「学生達に侘びとか寂の意味を教えるのがむずかしい」と云われましたが、本当に日本人以上に日本を知っておられる方です。当日の講義にちなんで布師先生は「六歌仙」など江戸端唄を披露されましたが、白人、黒人、茶色と様々な国籍の学生さん達が身をのり出したり、じつと眼目したりして聴き入り、終了後は私達にまで挨拶に来てくれて初めて聴いたけれどすごく感動したとたどたどしい日本語で話しかける生徒さんもおりました。

外国で三味線音楽を披露する事の意義やよろこびを身をもって実践し続けておられる布師先生の姿勢には何とか応援してさし上げたいと思いつながら何も出来ない自分の微力ながらもどかし思いました。

そして今回の旅行では今までの観光ツアーと違って裏からアメリカを見られたという気がします。前述の篠原けいじさん、又ウエスリン大学で日本史を教えておられるというビル教授、狐高の芸術家(写真家でも詩人でもある方)ともいえるおヒゲのアイルコーエンさん等々素敵な方達と巡り合っってお話を聞けたという事は私の生涯に一度の貴重な体験となつて、本当に良い旅をしてきたという満足と感激にまだ酔っている毎日です。

# 美紗の会の想い

橋本直樹

今年のゆかたざらいは第十五回ですから、さぞかし盛大なうちにも、美紗の会特有の和やかなものとなることでしょう。

私の手許に、『第二回美紗おさらい会』の印刷された目次と共に、一人ひとりの演目の解説と人物紹介が書かれた胡美紗師匠手書きのメモがあります。

例えば、十番目は長唄都鳥、安政二年六月二代目杵屋勝三郎の作曲、墨田川の春から夏へかけての情景を品よくうたったもの、糸は田中さん、三味線をはじめ一年二月、唄は小高さん、小唄ははじめて一年だが長唄は四ヶ月とあります。因みに私のことですが、出しものは小唄「あの日から」・「空や久しく」の二曲、赤坂グループの幹事として活躍、小唄歴三年、この会を最後にバンコクに栄転と書いてあります。

この第二回は富本豊美喜師、藤胡栄佳さんといった師匠の兄・姉弟子や客分格のご出演もあり華やかで盛大なものでした。美紗の会の本格的発足であったように思います。ところで、第一回目はどんなだったのか。出演者も少なく、目次も印刷するほど作らなかっただけに残っていません。しかし、胡美紗師匠の旗上げともいふべきことでした

からここで少し記しておきたいと思います。

昭和五十八年のお正月、目黒のお宅の二階でのささやかなおひきぞめの席で、師匠から今年はおかた会をしますとの宣言がありました。私はゆかた会とはどういうものか全く初耳で、へえーっ僕達も出るのですかという調子でした。師匠の独断専行で日取りは五月某日、場所は南平台会館で準備は着々進みこちららのはんびりしているうちに、はや当日となりました。真夏の

ように暑い日でした。会場の設営には師匠がお勧めだった渋谷のある会社の人が応援してくれていました。さあよいよ開演。「皆で白扇を唄いますから前に出て下さい」といわれて、赤坂組(当時は嘉本佐久間大西橋本の四人)は尻込みしながら観念して、ようやく並んで坐つたものの唄は蚊の鳴くような声でした。誰か吹き出すのを必死でおさえている様子でした。それでも師匠は怒りもされず、和やかに会を進められました。そんな会ではありましたが、こちらもそれを機に小唄を習っているという自覚が生れたように思います。

今から思うと、胡美紗師匠はあのころ芸一筋に生きて行くという決意と自信を持たれ、志を立てられたのではないかと

その意味で第一回おさらい会が跳躍の踏み台となったのではないかと思います。というのは、その後もなくアルバイト先の会社をやめられ、西松文一師について地唄を習われ、美紗の会を形づくり、そして翌年第二回を盛大にやられたのでした。

第二回は昭和五十九年六月二十三日午後一時半より商船三井赤坂クラブで催されました。普通なら日曜日は閉館のところを、当時人事部副部長だった本郷君の裁量で特別にしかも無料で借り切ることができました。本郷君はまだ入門していませんが、

理解がありました。ひる前からあちこちの部屋で着更えやら稽古の音が聞こえており、私達もはじめてゆかたを着たのを覚えてます。

## 深川八景観賞記

## 西松布 咏

新緑の美しいみどりの日、四月二十九日に、国立大劇場で恒例の「錦会」が催された。人間国宝であられる舞踊界の重鎮花柳寿楽師一門の会である。我が美紗の会にいつか華麗な踊りを披露して下さる飛田さんこと千寿文師が荻江節「深川八景」を踊られるので

の二節にもあるように深川芸者は、決して客にこびず品格を重んじる——そんな芸者の心意気を指先にまで感じさせるが、表情は、あくまでたおやかで——「芸は人なり」というが、観ているうちにやはり日頃の千寿文師とオーバerrappしてしまふ。一挙一動が自然な流れの中にありながら決して流されない。白い足袋は、しっかりと地についていて、ひとつ／＼の動きに無駄がなく、それでいてゆつたりと静かに、ほほえんでいる。現在失いつつある日本の美の極致を見せていただいたように、あつという間の至福のひとつとさだめた。

## 新人紹介

水野 陽子

陽子ちゃんは高輪台小学校の三年生、八才の元気な女の子です。一才でお父さんの転勤でサンフランシスコに移住し去年の四月に帰国したばかり。目下英会話の勉強もしてありますが、音楽が大好き。お母さんは閑崎ひで女師門弟で「杜季女」の名を持つ名取りだとか。唄ばかりでなく三味線のおけいこもしています。ちゃんと正座をして大きな声で「さくら」も唄えるようになりました。ペテランの皆様陽子ちゃんに負けないように頑張って下さいね。

## 後期スケジュール決まる

布詠師の後期のスケジュールは次の通り

- 六月四日(水)華の会・閑崎ひで女舞の世界 国立小劇場 三時—八時
- 今年華の会で六曲唄い、六時半からのひで女舞の世界では山村流の「ゆき」を唄うことになっている
- 六月十三日(金)江戸情緒の夕べ 日立シビック多目的ホール 六時より
- 落語の初音家左橋師・紙切りの林家正楽師と共に江戸の情緒をたつぷり楽しんでいただくことと端唄や小唄で江戸の華を咲かせることになっている
- 六月十五日(日)千寿文会 青山メトロ会館 一時より
- 飛田さんこと花柳千寿文師一門の浴衣ざらい
- 松づくし・涼み舟・河水を地方演奏
- 六月十七日(火)六月二十七日
- ハンブルグフェスティバル公演
- 閑崎ひで女・清女地唄舞公演に地方として参加
- 十月一日(水)神崎美乃舞の会 国立小劇場
- 山姥・露は尾花を地方演奏
- 十月十二日(日)美紗の会十五回おさらい会
- 青山メトロ会館和室において十五回を祝して日頃の成果をお客様に聞いていただき、盛大にパーティで、皆様と共に多いに語り合います
- 十月二十二日(水)清麗会 閑崎清女りさいたる 国立小劇場
- 西行・ゆかりの月を地方演奏
- 十一月九日(土)十七日
- パリドトンスフェスティバル 日仏会館ホール
- 閑崎ひで女 地唄舞公演に地方として参加